

第83回麻布獣医学会 一般演題2

放射線治療により縮小の認められた顔面に発生した 切除不能な非上皮性悪性腫瘍の犬の1例

堀川 歴央¹, 堀川 敦子¹, 圓尾 拓也², 信田 卓男²

¹レオどうぶつ病院, ²麻布大学附属動物病院

[はじめに]

大型犬の口腔を含む頭部に発生する軟部組織肉腫には線維肉腫などが含まれるが, その治療の第一選択は広範な外科切除である。しかし, 完全切除が困難な部位に発生することも多く, 不完全な切除による再発率が非常に高い腫瘍であるため治療に苦慮することが多い。そのため, 放射線療法を外科療法に併用あるいは単独で行うことがあるが, その効果は緩和的である。また, 常用X線による低線量の治療に対する反応は悪く, 高線量の治療が推奨される。

今回, 切除不能な顔面の非上皮性悪性腫瘍に対し高エネルギーX線外部照射単独の治療により良好な経過を得ている。

[症 例]

ラブラドル・レトリバー, 去勢雄, 10歳。既往歴は特になし。1週間前に左目の下の頬の辺りの腫れに気づき他院を受診。5日間の抗生物質の投与に反応せず, 当院に来院した。

[検 査]

初診時, 腫瘍は左上顎骨から頬骨にかけて扁平に広がり底部の骨との固着が認められた。腫瘍からの細胞診では悪性所見を伴う間葉系細胞が多数採取された。領域リンパ節の腫脹は認めなかった。頭部と胸部の単純X線検査では, 腫瘍底部の明らかな骨の変化は認められず, 肺転移も認めなかった。腫瘍からのコア生検の結果は非上皮性悪性腫瘍であった。

腫瘍の存在部位より切除は困難であり, たとえ拡大切除しても再発の可能性も高いと予測されたため, オーナーは放射線治療を希望し麻布大学附属動物病院腫瘍科を受診した。

大学でのCT検査では腫瘍底部の骨溶解像が認められた。

[成 績]

高エネルギーX線装置により一回線量8Gy, 週1回合計4回, 総線量32Gyの緩和的照射を行った。

4回の放射線照射終了直後には腫瘍の軽度縮小し, 照射範囲内の硬口蓋の一部に潰瘍病変と患側の眼に結膜炎が認められた。照射終了1ヵ月半後には腫瘍は肉眼上消失した。照射部位皮膚には脱毛と発赤が認められ, 硬口蓋の潰瘍病変は改善した。照射終了3ヵ月半後においても腫瘍の増大は認めず, 胸部X線検査では転移所見は認めない。皮膚脱毛部位には白い被毛が発毛し(元の被毛は黒色), 良好なQOLを保っている。

[考 察]

一般に軟部組織肉腫の転移率は高くないため, 外科切除が適応でない場合には局所の腫瘍増大により死亡することも多い。今回, 高線量のX線照射単独での縮小効果が認められた。われわれ一般開業医にとっては治療を断念する前のひとつの選択肢であるといえる。その際には慎重に適応症例を選ぶ必要があるようだ。